

イースター用テッポウユリの育種に関する研究 (第二報)

新品種育成

松江 喜三郎

(佐賀県知地営農指導所)

1. 諸 言

輸出用の主要品種である黒軸テッポウユリは、米国の優良な改良種に草萎、花容共に劣り、ことに栄養繁殖を永年繰返して来たために、バイラス罹病が甚しく将来性が期待できない現状にあり、輸出振興するには品種改良に倣ねばならない、そのために、佐賀県輸出農産物増殖指導所以来、テッポウユリの育種を行って来たが、既存品種の組合せによるF<sub>1</sub>世代に於ける個体選抜育種を一応終了したので、その中より最も優れた鎮西六号を選抜したので、これについて報告する次第である。

本研究を行うに当って、御懇篤な御指導を賜った、赤城、橋爪両前所長、幸地所長、並びに促成検定を担当して戴いた農林省園芸試験場阿部博士、久留米支場田村博士、及び研究に御協力下さった職員、研究生、材料を提供下さった、農林省園芸試験場久留米支場田村博士、に深甚の謝意を表す次第である。

2. 育成経過

従来黒軸テッポウユリの栽培容易な特性を保ちながら、欠点とされる、葉色、葉形、花の大きさ、花形等の草萎、花容を改良すると共に、球根肥大性を高め、尚かつ耐病性品種の育種につとめたものである。

1950年、黒軸、東郷、静軸、安川、烏アッポウ、K 2002、(佐伯15号)、K 2005、K 2006 (佐伯30号)、リーガル、クロフト、エース、相互間の43組合せ、1951年にはこれ等の品種に市来、穂子島、高砂を加へた、58組合せ、1952年には、更にクレオール、エスラーメ、在来青軸を加へた57組合せの人工交配を行つた。

年に依り多少の时期的差はあつたが、概的9月中旬にフレームに1粒蒔し、11月下旬～4月中旬までガラ

ス又はビニール障子を被い防寒した。播種翌年9月、実生床より個体別に掘り上げ直ちに同場に植付、球根肥大促進のために摘播し、球根育成を行い、4年目に開花さし地上部の形質優れた個体を選び、更に6年目に地下部の形質につき選抜を重ねて来た、その間鎮西1号より24号まで選抜したが、鎮西六号が最も優れていた。その育成経過は第一表の通りである。

第1表 育成経過表

年目	年	交配	♀	♂
第1年目	1952	交配	エース×K 2002	
		播種	270粒フレーム	
2年目	1953	球根養成	136個体	
3年目	1954	球根養成	55個体	
4年目	1955	地上部形質選抜	AC×K 2002-4	
5年目	1956	増殖	500球	
6年目	1957	地上部形質選抜	鎮西六号	
7年目	1958	第三回コンクール入選	久留米園場	
8年目	1959	増殖	2,000球網室	
9年目	1960	第四回コンクール入選	当所園場	
		増殖	810球	
10年目	1961	第五回コンクール入選	平塚温室	
11年目	1962	見本輸出	150,000球ネット栽培	
		増殖		

3. 特 性

エース、米国で育成された、イースター用化として最も優れた品種とされている。草丈低く、葉は濃緑色で密に着生し、花は大きく着花数が多い。

K 2002、この品種は農林省園芸試験場久留米支場田村博士が、種々子島の野生中のユリより選抜された品種で、のちに佐伯農園が佐伯15号と命名したもので、青軸の稍々草丈の高い、切花、鉢植兼用種である。

鎮西六号、概して母親であるエースに似ている、葉数多く、葉の着生密な葉幅の広い、稍々葉の長過ぎる葉色著しく濃い品種で、花は純白で内外花卉共に幅が広く強く反転するので花筒が短く花に茎が大きく開く大輪咲であるために欧米人に好まれる形質を持つてゐる。

第2表 地上部の特性表

品 種 名	種球重	種球周	草丈	葉数	主軸の色	葉色	葉長	葉幅	開花数	開花日	花柄長	花長	花口茎	花卉の反転	花向	花 序	
																	ケ
♀ エース	100	21	56	74	廿	卅	15.1	2.4	7	6	14	7	15.5	13.4	+	稍々下	二段花序
♂ K 2002	110	22	64	66	廿	卅	17.2	2.6	5	10	8	8	17.3	13.3	+	稍々上	乱花序
比較 黒軸	100	22	48	83	卅	+	14	1.5	6	16	7	7	15.5	12	+	水	花筒分岐
♀ ジョージア	78	21	63	83	+	卅	17	2.2	10	12	8	17.1	16	+	稍々下	乱花序	
鎮西六号	115	18	57	90	+	卅	18.5	2.4	6	13	12	16	16	+	稍々上	乱花序	

備考 植付日 1960.10.25 栽植距離 60cm×20cm 調査日 6月12日～18日 種球の大きさ 木子 2作球

第3表 地上部形質の特性表

作型	品 種 名	種 球		掘 上 げ 球							肥大比	球焼
		重	周	重	周	高	再芽	割玉	木子重	木子数		
		gr	cm	gr	cm	cm	ケ	ケ	gr	ケ		
鮮片繁殖 (1作目)	黒軸	—	—	24.7	11.9	3.1	0	0	1.3	1.2	100	—
	ジョージャー	—	—	59.1	13.6	3.7	0	0	1.6	1.6	239	+
	鎮西六号	—	—	53.3	14.8	3.2	0	0	1.3	1.3	215	+
木子作 (1作目)	黒軸	4~5	—	27.3	12.7	3.6	0	0	3.1	3.1	100	—
	ジョージャー	4~5	—	64.4	17.2	4.4	0	0	3.6	3.6	236	+
	鎮西六号	4~5	—	59	16.7	4.3	0	0	4.2	4.2	218	+
中作 (2作目)	黒軸	24~28	9~10	60.5	17.3	3.8	0	0	5.7	5.7	100	—
	ジョージャー	45~50	14.5~15.5	97.6	20.1	4.1	11.6	13.2	5.3	5.3	161	+
	鎮西六号	40~45	14~15	9.2	19.8	4.6	2.4	0	7.1	7.1	142	+
本作 (3作目)	黒軸	55~60	15~17	83.8	20.8	4.05	8	4	8.7	8.7	100	—
	ジョージャー	60~70	16~17	13.6	23.7	4.8	37.8	25.4	10.6	10.6	162	+
	鎮西六号	75~85	17~18	16.4	24.4	4.8	7	6.2	12.4	12.4	191	+

備考 場所 網室栽培 植付月日 鮮片催芽 8月10日, その他 10月15日  
 栽植距離 鮮片繁殖1作目 20cm×10cm, 木子作 30cm×12cm, 中作35cm×15cm, 本作40cm×20cm  
 供試球数 100球 調査球数 30球 摘蕾期 5月5日~15日 掘上期 8月10日

第4表 促成栽培成績

A 農林省園芸試験場久留米支場に於ける成績 1962

品 種 名	草 丈	葉 数	主軸の色	葉 長	葉 巾	花 長	開花日	花 長	花口茎	花 向	花弁の反転
	cm	枚		cm	cm	ケ	月 日	cm	cm		
黒軸	25.8	71.5	黒	14.1	1.3	3.8	3 13	14.2	11.1	稍々上	+
ジョージャー	50.5	67	—	17.2	2.1	8.8	10	14.3	12.0	稍々下	+
鎮西六号	51.0	48.3	+	18.7	2.2	8.3	22	15.7	13.6	水 平	+

備考 処理方法 予冷 10日間 13°C 本冷 40日間 7~8°C  
 時 期 // 9月15日~24日 // 9月24日~11月3日  
 球根の大きさ 鎮西六号 球周 185~21cm 球重 90~115gr

B 農林省農業技術研究所園芸部に於ける成績 1961

品 種 名	種球の大きさ	主軸の色	草 丈	葉 数	花 口 茎	花筒の長さ	平均開花日	花 数
	cm		cm	枚	cm	cm	月 日	ケ
黒軸	19~21	半黒	52	56	11.5	14.5	4 18	4.1
ジョージャー	17~19.5	青	57	61	12.8	14.0	20	4.7
鎮西六号	21~24.5	半黒	65	64	13.5	14.5	20	5.3

球根の肥大性, 鮮片繁殖1作球, 木子作1作目及び2作目では共にジョージャーに比べて稍々劣るが, 黒軸より著しく優れている. 本作3作目ではジョージャーより肥大し優れている.

再芽球, 割玉球, 1作目では殆んど発生しないが, 2作目よりジョージャー10~13%発生するのに, 鎮西六号6~7%でいづれも優れている.

球根の形, 球形に近く頂部の稍々とがつつた, 球割りが著しく良い, 鮮片の幅が広くて厚い.

球焼, 球根の球焼は黒軸には劣るが, ジョージャーと殆んど変らない.

促成栽培成績は同場の成績とは大差なく, 草丈に於いてジョージャーより鎮西六号が稍々高く, 葉が長過ぎ稍々脆弱になり易い欠点があるが, 花は大きく花数には差がない.

IV 考 察

人工交配より見本輸出まで11カ年を要しているの

今後, ビニール, 寒冷所利用に依り生育を促さし育種所要年数を短縮すべきである.

育種目標をイースター用に置き, 現在の主要品種である, 草薺, 花容共に劣り, バイラス罹病率の高い黒軸と, 導入された, ジョージャーの球根生産困難な点を解決すべく, 育種着手したが, 草薺, 花容共に優れ, 球根肥大性の高い鎮西六号を育成したが, 未だ葉長が長過ぎるために, 単位面積当の収容株数が減少する点と軟弱に育ち易い欠点, バイラス低抗性, 球根の球焼等の難点はこのこされているが, 内外長弁の幅広く, 長口茎の大きく開く大輪咲の着花数の多い, 花と葉の均整のとれたのを育成することが出来た.

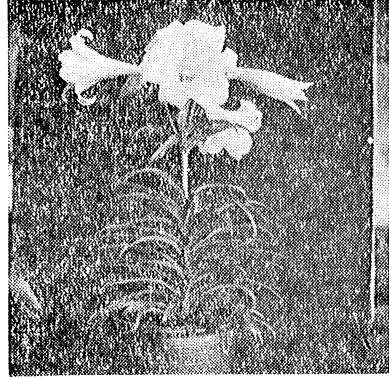
V 摘 要

テッポウユリの輸出振興のために1950年より育種に着手し, 育種目標をイースター用に置いた.

エース×K2002の組合せの実生個体より鎮西六号を選抜した.



露地栽培の鎮西六号



促成栽培の鎮西六号

鎮西六号は早軸の草菱，花容の劣る点，ジョージャーの球根生産困難性を解決し得たが，バイラス低抗性は解決し得なかつた。